

氏名(本籍)	永井 賢隆 (群馬県)		
学位の種類	博士 (仏教学)		
学位記番号	博仏甲第29号		
学位授与の日付	平成26年 3月25日		
学位授与の要件	学位規程第5条第1項該当		
学位論文題目	道元禅師の思想形成の研究 — 『宝慶記』を中心として—		
論文審査員	主査 駒澤大学教授 博士 (仏教学)	奥野 光賢	
	副査 駒澤大学名誉教授	池田 魯参	
	副査 駒澤大学教授	角田 泰隆	

論文内容の要旨

本論文は「道元禅師の思想形成の研究——『宝慶記』を中心として——」と題するものである。論題にいう「思想形成」の研究とは、今日伝わる道元思想がどのように形成されたかを明らかにすることを意図している。本論文ではあまたある形成要因の中でも、如浄下での参師聞法を最も重要視する。因って、副題を「『宝慶記』を中心として」とした次第である。

詮慧・経豪に始まる『正法眼蔵』参究の歴史は長く、両者の解釈を基本とする伝統宗学は今なお受け継がれている。序論において述べるように、「宗学」をどのように定義するかという問題は、戦後から現代に至るまでさまざまに議論されている。道元研究は多種多様であるが、『宝慶記』研究は、『正法眼蔵』や『永平広録』研究に比べると、実に少ない。それは「宗学」という言葉が表すように、道元が「宗」、すなわち「セクト」の中で基本的には取り扱われてきた結果とも言える。「セクト」の内部から行われる『正法眼蔵』や『永平広録』への参究は、誤謬の余地を挟まない護教的な要素を内包する。それは完成された道元像の形成とも言えるのであり、宗祖としての位置づけは、他の経典や論書を『正法眼蔵』等の著述と対等に位置づける客観的な視座を有さない。それは超歴史的に道元を捉えるということであり、道元思想が思想史上のどの位置にあるのか、といったことは問題にならないと思われる。

いったい、生涯を通じて、思想的遍歴のない人間などいるのであろうか。本論文で用いる「思想形成」の研究とは、我々と同様に道元を一箇の人間として捉える、ということの意味する。

道元は、教学を学んだ後に禅を学んだのであり、道元思想の基盤は教学にあったとも言うのであろう。鏡島元隆『道元禅師と引用経典・語録の研究』(木耳社、1965年)における成果は、道元の教法的知識素養の豊饒さを浮き彫りにした。鏡島氏の成果によれば、道元が最も引用した経典は『妙法蓮華経』であり、経典以外の仏教典籍としては荆溪湛然の『止観輔行伝弘決』(以下、『輔行』)である。

道元が天台教学を重要視していたことは明らかであり、天台教学との関係は山内舜雄氏や池田魯参氏をはじめとした多くの研究者によって論じられてきた。

それらはいずれも優れた成果であるが、本論文において筆者は敢えて『大智度論』（以下、『大論』）を、『宝慶記』に次いで、その思想形成において重要な論書であると位置づけることを試みた。

鏡島氏の成果に依れば『大論』の引用は一六回であり、これは『輔行』に次いで二番目に多い。龍樹の手によるとされる『大論』は、百科辞典的性格があると評されるが、やはり空観思想を背景に持つ論書である。そもそも仏教の歴史を俯瞰すると、思想的には中観派と瑜伽行派に大別され、それぞれの立場でブッダの教えをどのように理解し、どのように実践するかという議論の歴史であったと言える。

本論文では如浄も道元も『大論』について十分な知識を持っていることを確認する。天台教学は『大論』を一つの基盤として成立するが、道元や如浄の『大論』の依用は単純な天台教学の移植ではないと思われる。少なくとも如浄は「自らが仏法の総府である」という自負を持っていた。そのような自負は、禅や教学といった差別をもたない境地であったであろうし、またそれは自身を取り巻く環境と自己を相対的に比較した上での自己の思想的独自性、もしくは正当性を自認していた結果と言えるであろう。

本論文は上述のような視座に立って、道元の思想形成を『宝慶記』を中心に論じたものである。以下にその概略を示す。

「序論」では、所謂「宗学」の考え方が明治時代以降、どのように構築されてきたかを、先達の議論を踏まえて概略ながら考察した。かつて「宗乘」と呼ばれた所謂「宗学」は、さまざまな時代の変化の中で、人文科学的な手法を駆使して論を展開する学問としての「宗学」と位置づけられるようになったが、はたしてそのような宗乘から宗学への脱皮を果たし得たのかどうか、筆者個人の問題意識を踏まえながらの検討と現状認識について論じた。

「本論」の第一章では三節を立て、資料の検討を行うとともに、道元の出生から如浄下に参じるまでの行状とその問題意識について論考した。

第一節では、伝記史料の検討として最初期に成立した『行状記』と『伝光録』の対照を行い、その差違を確認した。どちらの史料もそれなりの共通のソースの上で成立したのであろうが、表現には微妙な差がある。とくに『行状記』が記す、「本来本法身云々」の疑団や「叱咤時脱落」の話などは、それが歴史的な事実を伝えているかどうかは疑問ながら、道元の思想形成を考える上で、「文字と弁道」、それは「学と行」とも言い換えられるが、要するに教学から禅宗へ転換した道元の生き方を伝えるという意味で大きな出来事であると考えている。

第二節では、出生から入宋するまでの道元の学びと、そこから派生したであろう問題意識について論じた。

伝えられるように、道元における仏教の学びは母の死に際して無常を観じたことに始まり、比叡山

では天台教学を中心に、大蔵経を二度にわたって読んだとされるほど、各種経論に及ぶものであった。このような学びをしつつ、それでも道元は比叡山から下山する。その理由について、諸伝は等しく中古天台本覚法門への疑問であるという。確かにそのような思想的な問題も否定できないが、そこでは先にもみた「文字と弁道」という問題設定も可能となる。近年特に問題とされた本覚思想に対する批判という教理学的な問題は確かに大きな問題であり、道元自身も「如来蔵」や「仏性」といった思想と「縁起・空」の思想との相反に対して苦悩した可能性も否定できない。しかし、どのような思想上の苦悩があったのか、道元自身の言葉からはそれを読み取ることは出来ないのである。もし思想上の難解な疑問を解決するというのであれば、たとえば比叡山の他の学僧のように経典・祖録をひたすら学べばすんだのではないだろうか。

諸伝が伝える下山理由がある一方、道元の著述における当時の僧に対する評価や周囲の状況を考慮すると、むしろ比叡山全体に蔓延していたであろう天台僧の腐敗墮落といった、現実的・具体的な部分に嫌悪感を抱いていた、と推察した方が妥当であるように思われる。すなわち『随聞記』が伝えるように、道元は日本においては道理を説くべき「高僧達」の多くが、世俗にまみれて名聞利養を求めるところをばかりを考え行動しているが、経論や『高僧伝』などを繙くと、そのような意識は嫌悪されるべきものであると記されており、そのような価値観の方が「正しい」ことであると気がついたという。このように考えると、当時、多くの心ある仏教者（求道者）と同様に、道元が入宋への意識を強く持つようになっていったことは容易に推察できるのである。

両者を総合して考察すると、道元の問題意識というのは、高邁な思想的を論ずるにもかかわらず、現実の生活・生き方の部分では墮落してしまうという、「理想と現実」との埋めがたいギャップとどう向きあうかという問題が大きな要因として浮かび上がったのではないかと推察した。

そして当時において最も入宋に関わる情報を有していた建仁寺に赴いたことが、結果として、栄西の弟子である明全に参じることに繋がったのである。

栄西との相見問題はしばらく措くにしても、道元は明全こそが一人栄西の高弟であると認識していた。少なくとも明全は栄西の薫陶を受け、持戒堅固にして入宋求法の意識も高い高僧であった。比叡山の腐敗・墮落に接していた道元において、明全が持戒堅固にして行持綿密であるということは、衝撃的であったであろう。思想的な交流がどれほど存在したのかは未詳ながら、求道参学における姿勢は「先師」と尊称するに値したのであろう。また明全の持戒堅固・行持綿密の生活を間近にみた建仁寺においても入宋にかける思いを止めることがなかったのは、ひとえに「正師」を求めていたのと、「中国の高僧への憧憬」からであろうと論考した。

第三節では、入宋時の動向と如浄の会下での問題意識について論考した。

第一項では、宋代禅の特質について、国家との関係とそれに伴った三教一致説の展開、そして宗派禅について確認した。

第二項では『伝光録』には記されないものの、『行状記』をはじめとする諸伝にほとんど共通して記録される「新到列位」にかかわる問題について論じた。「新到列位」の説話は、やはり後世になつての教団運営と在家信者との関係において創作されたものではないかと結論づけた。

第三項では入宋時の船中における老典座との出会いや、語録を読みふける道元に対し「何の為に語録をみるのだ」と問いかける僧、隣の単で搭袈裟の偈を真剣に唱える僧との出会いなど、それらから読み取れる道元の意識について論考した。そこから浮かび上がる道元の問題意識は、やはり「理想と現実」、換言すれば「文字と弁道」という現実に生きる自己に即したものであることが明らかとなった。

そして第四項では、『宝慶記』冒頭に掲載される、如浄に参問の許可を求める一文での「名相」という一語に注目し、如浄参学時における問題意識について論考した。筆者は四巻『楞伽經』等に説かれるこの一語をもって、道元は自身の当時の心境と修道の段階を図らずも露呈しているのではないかと論考した。

またこのような視座から『宝慶記』を最初の拝問から順を追っていくと、第二段では「教外別伝」について問い、第三段では教外別伝を文字通りに理解することに端を発する学人接化を問題とし、そして第四段では「冷暖自知」に関するものへと質問は深化し展開していることが明らかとなった。道元は「自知により成仏」するのであるならば、一切衆生は本から如来であるのか、と疑問を抱き、それを質問したところ、ある人は「その通りである。一切衆生は本より如来である」と答え、またある人は、「必ずしもそうではないが、自らの覚性を感じて了知するならば如来である」と答えた。その二点が仏法であるのか、そうではないのかという質問であり、後者の言うところは先の第三段で否定される見解——「直下に見聞して便ち了ずる」——に相当することが明らかとなった。

これら入宋時における道元の言葉から、「文字と弁道」、「理想と実践」、そして「身と心」を分別して捉えるということに解答を見いだせないことこそが、道元における最も重要な問題であって、それが如浄との初めての出会いの時の「名相に滞る」と言う発言に繋がると論考した。

以上のように第一章では道元の動向を辿りながら、その問題意識・疑問について考察したが、その解決は、如浄との出会いによる「身心脱落」を待たなければならなかった。

第二章では、『宝慶記』の伝播を確認し、その成立について論じた。

先述したように『宝慶記』は、「如浄下参学の記録」としての側面が重視され、『正法眼蔵』や『永平広録』などと比べるといささか軽んじて見られてきたように思う。それは『宝慶記』は晩年の道元による創作であるという意見すらあることから明らかである。しかし『宝慶記』が道元の手による編集によることは筆者も認めるところであるが、第三章において論じたように、『如浄語録』と『宝慶記』の如浄像との間には、従来言われてきたほどのに差がないように思われる点、また道元の著作に用いられていない「除五欲五蓋」や「閉目坐禅」などの説示を考慮すれば、晩年において自身の見解と異なる内容を、あえて先師如浄の言葉として「創作」とは考え難いのである。すなわち『宝慶記』は道元が接した如浄そのものを伝えているものであると言えよう。

『宝慶記』が元は「日記・断簡等」であるか、それらをまとめて新草したものであるかという問題は、「日記・断簡等」である可能性は低いことを論じた。しかし、体裁がどのようなであったかという問題は当面『宝慶記』自体の価値に何ら影響を与えるものではない。道元という人間が形成される上で、最も重要な役割を果たした師如浄との邂逅を知る上で、『宝慶記』は他に代え難いものであると言えるの

である。

第三章では、如浄の実像を探るとともに「身心脱落」について論じた。

第一節では、鏡島氏の論考の後ほぼ定説と化していた『如浄語録』と道元を通して見た如浄の乖離という問題について論考した。『如浄語録』にみる如浄は、確かに鏡島氏の規定する宋朝禅者の特色を有している。同時に、国家に属さず自由豁达に生きる「言法華」や「端獅子」といった所謂「風狂・瘋癲」の人を仏祖として讃歎し、道教を主体とする祭りに対しては、社会風俗として認めつつ、「出家修行者としての態度はまた別」であるという、言わば「あるべき禅僧」としての「理想像」を有し、厳しい接化を行ったのである。五家七宗に対しても、臨済宗楊岐派の人々との親厚は強いものがあったが、「セクト」としての宗派意識をもって他の人々に接する態度は見受けられず、むしろ嗣承香を焚かなかったことは、「法灯＝曹洞宗」であることを殊更に標榜しなかったことの証左であると言えよう。五山に住持するほどであるから、権力との関係に代表されるように如浄は紛れもなく宋朝禅者ではあったであろうが、「宋代禅はこのように規定される」といった、「狭い意味での宋代禅者」ではなかったことが明らかとなった。

このように多面性を持つ如浄であるが、道元の間を通して見ると、国家や民間風俗との関わりを諫め、三教一致には否定的な見解をもち、「宗名」や「宗派」という括りを有さない、まさに「仏法の総府」としての「古仏」如浄となる。

両像の微妙な差違について検討を重ねた結果、『宝慶記』が伝える如浄像は、外国僧道元に見せた如浄の姿であるとともに、鋭敏な道元だからこそ感じられた如浄であり、また『如浄語録』に見ることができる如浄像は中国人の弟子たちが伝えようとした如浄像であって、どちらも如浄その人であるが、普段の如浄はやはり『如浄語録』が伝える如浄像の方が実像に近いであろうことを論考した。

しかし『如浄語録』が伝える如浄像が実像に近いからといって、道元が伝える如浄像との間が全く隔絶しているわけではなく、この差違は視座が異なるから起こりえたのであり、ともに一箇の人間としての如浄なのである。

本文中において述べたように、多分、如浄は人間として幅の広い人物であったように思われる。宋朝禅者としての「言動」は五山の住職という社会的立場から「要請」されたものであろうし、一方で『如浄語録』の「序」に「曹洞にも臨済にも寄らずに一家をなした」と伝えられ、また弟子の雪屋正韶からはその接化に対し「曹洞宗旨が不鮮明となった」と批判されるのである。

筆者は道元においては長い「学び」の中で確立させた「正師」のイメージが無意識のうちにあり、それと如浄の「ありよう」が一体化したところが「古仏」であり「正伝の仏法の体現者」としての如浄像を確立させていったと考えている。そこには「言法華」等の自由人を評価する一段で述べたように、道元が如浄の心底にある「あるべき禅者への憧憬」を汲み取った結果ではないかと推察する。

当然のことながら如浄も「生きた人」であり、その人生は単一の視点によって規定し得ないのである。多面的な人間のある部分——仮にこれを「日常性」とみれば——、時には『如浄語録』のような如浄像が浮かび上がるし、また別の面では——これを「本来性」と呼ぶなら——道元が「正師」と仰

ぐような如浄像が浮かぶとみてよいように思う。

第二節では、『宝慶記』にみる如浄の「身心脱落」を探り、道元の標榜する「身心脱落」との関係について論じた。ここで浮き上がってきたのは『大論』との関係である。如浄が天台教学を学んだことは周知のことであるが、如浄は「身心脱落」を道元に説き示す時に、一方では天台の止観の儀則を前提にして説く。両者の学びからしてそれは当然であろう。しかし究極の所では、『大論』を下敷きに行っていると考えざるを得ないのである。

如浄は自身の説く「坐禅」は一切衆生に慈悲の念を忘れない、仏祖の禅であると説く。祇管に打坐する時「五欲・五蓋」、「無明蓋」が除かれ、心は柔軟になり、諸法実相に貫通すると説く。如浄は坐禅を手段として「諸法実相」を感得せよと主張するのではなく、只管に打坐する時のその「有り様」が「諸法実相」に貫通することであると説くのである。決してそれを目的化して邁進せよというような説き方はしていない。

次に道元の身心脱落についてである。道元は『弁道話』をはじめとしてその著述において如浄と同様の説示をもって、坐禅による身心脱落を説いている。『弁道話』では「身心脱落により凡夫の思量は截断され、一切はありのままの真実の姿として真理を表す」と述べている。これは「坐禅により身心脱落し諸法実相を観ずる」ということと同内容と言えよう。

しかし、一方で道元は目的を予想させる「五蓋・五欲」や「柔軟心」といった言葉を巧みに避けているようである。それが「迷悟情量」や「凡聖測度」とどこまで違うのであろうか。当面、筆者は結論を保留しなくてはならない。当然その部分に道元の独自性があることになるのであろうが、「諸法実相を観じる」ことこそ、道元の「身心脱落＝坐の強調」であると考えられる。目的を立てず、自然外道に落ちないためには、「妙修」に位置づけるべき「只管打坐」という「行」に収斂させなくてはならない。

諸法実相を観ずることで、修と証との区別はなくなり、「本証づから」の坐禅が標榜されるに至るのである。つまり身心脱落は、坐禅に対する信決定の機縁としても成立するが、身心脱落の本質は「柔軟心を得、諸法実相を観ずる」ことであり、またその坐禅は如浄が示すように、坐禅中において「一切を済度せんと願う」という大悲心に満ちあふれたものであり、それが仏祖の坐禅ということになる。

それが『弁道話』をはじめとした道元の著述の中において、結果的に「証上の修」として主張されるにいたったと考えられる。そのような大乘の仏としての坐禅は無始無終・生々世々のものであるとともに、在々処々なるものとして不断に行じられるべきものと道元は考えたのである。

このように人間道元と人間如浄の出会い、互いにとって千載一遇のものであったろうし、如浄は道元と出会ったからこそ「古仏」として理想化された一面を後世に残すことが出来たのである。また道元も「法と自己」という問題の解決を見ることができたのである。

「身心脱落」の定義をめぐっては、文字上では忠実な継承とは言えないであろうが、第四章で再度道元の坐禅について述べたようにその根底とする所に『大論』と龍樹が存在し、これを起点として両者は「慈悲の禅」の強調をなしたのであり、それは理論的な裏付けという意味よりむしろ「信仰」に関わる、「腹落ち」であったと筆者は考えるのである。

第四章では五節を立て、道元に受容された『大論』を中心に道元における空思想について論じた。

第一節では、『大論』の引用実態を解明するとともに、最初期の引用である『正法眼蔵』『三昧王三昧』巻における受容について論じた。

第二節では、「風鈴頌」を中心に道元における虚空について論じた。『宝慶記』で話題になり、また「般若波羅蜜」巻などでも取りあげられる如浄の風鈴頌だが、風に乗って全身で鳴る風鈴のありように「般若」の現成を見て取った如浄と道元の「仏法」観を示す一段であること。そして如浄が道元だけが自分の風鈴頌を理解してくれたと絶賛する、その両者の人間関係も含めて論考した。

第三節では、近年の宗門でも問題となった「懺悔滅罪」について論じた。「懺悔すれば業果は転重軽受」というのが通説であったが、それは誤りであり、罪相は軽くなったり亡くなったりしたとしても、「業」が滅することはないというのが、近年の意見の中心にあると言える。しかしそれだけであろうか。『大論』では、十善戒を犯した「業」は懺悔しようとも消えることはないが、衆生を悩ませることのない微細な業は、心中に恨みを懐かないことを条件に、極めて限定的ながら払拭できると説くのである。このような『大論』の考え方と、道元が「溪声山色」で説く懺悔滅罪がどこかで結ばないかと試論を述べたものである。

第四節では、『林間録』における長沙と皓月供奉との間で交わされる「業障本来空」の問答について、中心思想である「三時業」の問題を『中論』がどう理解したか、あるいは中国ではどう理解されてきたか、そして道元はどのように理解したかを論じた。

第一項では、道元と『林間録』の関係が『宝慶記』において見られるように如浄の薦めによるものであることを確認した。第二項では、『宝慶記』における「業障本来空」に対する見解を確認するとともに、『林間録』では長沙の見解を『中論』を傍証として肯定していることを確認した。第三項では、『林間録』に引用された『中論』における業理解について論考した。第四項では、『中論』と『林間録』の業理解の差違について論考した。『林間録』では、「一切法を空と解せば、現実において業障はおこらない」と考え、それは「『中論』で説かれる見解に裏付けられる」と解釈しているが、それは『中論』の意図的な読み替えによりなされていることが明らかとなった。第五項では、道元が「業障本来空」を具体的にどのように解釈したかを論じた。道元は『中論』の歴史的な権威に惑わされることなく、自身の業理解を有していたことが明らかとなった。

第五節では『涅槃経』と『大論』との関係から、両者を折衷しつつ、『涅槃経』に説かれる理念的な内容を『大論』に説かれる実践的な内容へと繋げることで、「理想と現実」という問題への落としどころとしたであろう事を論じた。

資料篇では、道元の著作に引用された『大智度論』の具体的な文言を、比較対照し、あわせて『輔行』についても所在を確認した。

結論では、如上の議論をまとめ、問題の大きさを踏まえ、本論で未解決なものを背景に今後の研究

への展望もあわせて述べた。

以上、各章各節で論じたことを纏めてみた。

総説すれば以下のようにになると考える。

本論文が主として取りあげた『宝慶記』は、筆者が考える以上に、若き日の道元を伝えていると言えよう。如浄との質疑応答を読むと、道元の真面目さと、如浄の寛容さが十二分に伝わってくる。現実生き、「理想と現実」の狭間に徹底的に向き合い、晩年に到っても、留まってしまえば「仏法の世界から退転」してしまうことを畏れたであろう道元を明らかにすることで、道元という人間をより魅力的に、そして現実に生きた仏教者として捉えることができるように思う。道元は辿り着けない「偶像」では決してない。

「宗祖」という「要請」をもって形作られた「伝記史料」による道元禅師像がある一方、『宝慶記』の生きた道元像は——当然の事ながら——現実に苦悩する我々となら変わらない一面を有していたのである。それは必然的に、道元に思想の変化を認める立場でもある。揺れやブレ、広がりがあったのである。ある程度の定義づけを行うのが研究であったとしても、それはあくまで一側面であろうことを忘れてはならない。「要請」された「宗祖」でもなく、一求道者としての「沙門」でもなく、ただ「人間」道元である。如浄と道元の師資の関係は、形骸化された師資関係ではない。

最終的に人がついていくのは権威でも理論でも金銭などの現実的な利益に対してでもなく、「人」であろう。現実的に不合理で不利益であることが分かっている、「この人が言うのであれば」という「腹落ち」である。そもそも真に合理的な人間は、学問上の仮定としてのみ存在するのではなかろうか。例えば経済学が、合理的な人間を仮定するものから、現実の非合理的な人間を想定する「行動経済学」を提唱したのは、学問上の仮定では対応しきれない現実が存在するからであろう。

個人主義が強調される昨今において、「権威」はその意味を失いつつある。「要請」された道元禅師像ではなく、現実の我々に即した道元像こそが、今、必要であると考えられる。

論文審査結果の要旨

I 論文の概要

本論文は、400字詰原稿用紙に換算すると全文、大凡1,300枚に及ぶ大論文であり、その論題が示す通り、道元禅師(1200-53)の思想形成を『宝慶記』を中心として解明しようとしたものである。本論文の目的は、道元禅師の叡山修行時代の問題意識と、その解決のために入宋した禅師が真剣に向き合って「正師」と仰いだ如浄との間に交わされた記録である『宝慶記』を通して、道元禅師の思想形成を浮き彫りにし、明らかにすることにあるとする。『宝慶記』を従来以上に重視して考察した点が本論文の大きな特色である。全体の構成は論文篇(50×24、約420頁)と資料篇(30頁)よりなり、以下の各章よりなる(序論の節と本論の項は略す)。

序論

本論

第一章 道元の問題意識

第一節 伝記史料の検討

第二節 参学のはじめ—出生から建仁寺参学—

第三節 入宋参学

第二章 『宝慶記』の成立と伝播

第一節 『宝慶記』の伝播

第二節 冒頭部の参問許可の一段について

第三節 『宝慶記』の成立以前の形式について

第四節 『宝慶記』の成立時期とその意図

第三章 如浄と道元

第一節 如浄像について

第二節 身心脱落考

第四章 道元と空思想——『大智度論』を中心として——

第一節 道元における『大智度論』の引用

第二節 道元の虚空理解——風鈴頌を中心に——

第三節 「懺悔滅罪」と『大智度論』

第四節 道元の業理解——『林間録』と『宝慶記』

第五節 『涅槃経』と『大智度論』——「発菩提心」巻を中心として

結論

資料編 道元の著述に依用された『大智度論』一覧

まず序論では、宗乗と宗学との対比や道元禅師をめぐる研究の軌跡を概観し、論者の研究の立場について述べている。曹洞宗の一僧侶でもある論者は信仰的な立場に立ちながらも、史料を厳密に取り扱い客観性と説得力のある研究を目指したことを述べる。

本論第一章では、道元禅師の伝記史料の検討を行うとともに、出生から如浄下に参じるまでの行状とその問題意識について論じている。

第一節では、道元禅師の伝記の中でも最初期に成立した『行状記』と『伝光録』を取り上げて対比し、その中で特に「本来本法性」云々の疑団や身心脱落の話に注目し、「文字と弁道」「学と行」をめぐる問題意識を掘り下げ、その関係の究明、解決が道元禅師の思想形成において重要であったことを述べている。第二節では、出生から入宋までの修学時代に生じた疑問について考察し、第三節では入宋中の動静と、如浄会下に参じるまでの疑問について論じ、さらに道元禅師入宋時の新到列位に関する問題について、先行業績を紹介しながら検討し、これは道元禅師示寂後の曹洞宗教団において要請されて成立したものであると推測している。そして上述の疑問の解決が如浄との出会いによる「身心

脱落」によって得られたことを示唆する。

第二章では、『宝慶記』の伝播を確認し、その成立について述べ、『宝慶記』が道元禅師の思想を解明する上で重要な史料であることを四節にわたって論じている。

次に第三章では、如浄と道元禅師との出会い、そして「身心脱落」について詳説する。第一節では、『如浄語録』から知られる宋朝禅者としての如浄像と、『宝慶記』や道元禅師の説示から知られる「正師」と仰ぐ如浄像について、その相違の問題について取り上げ、鏡島元隆博士の成果をふまえながら再検討し、結論として、どちらが正しい如浄像というのではなく、また全く乖離しているのでもなく、一面的には決め得ない、両面をもっていた如浄を論定し、道元禅師の言説に見られる如浄像を肯定的に再確認している。第二節では、『宝慶記』にみる如浄の「身心脱落」を探り、如浄と道元禅師の思想的関連性について、「五欲・五蓋を除く坐禅」「諸法実相を観ずる坐禅」という観点からその共通性を論じている。その中で『大智度論』との関係を浮かび上がらせている点は新しい成果である。

第四章では、その『大智度論』を中心に道元禅師における空思想理解を考察する。『宝慶記』に『大智度論』からの引用が見られ、如浄の教説に『大智度論』の影響があることを論ずる論者は、道元禅師の思想にも『大智度論』からの影響が大きいと推測する。第一節では道元禅師における『大智度論』の引用を確認し、『正法眼蔵』『三昧王三昧』巻における受容について、第二節では「風鈴頌」を中心に道元禅師における虚空について、第三節では「懺悔滅罪」について『大智度論』における懺悔や滅罪に関する教義と道元禅師が説く「懺悔滅罪」の関連性について論じ、第四節では道元禅師における業論（三時業）を『林間録』と『中論』を中心に論究し、第五節では『涅槃経』と『大智度論』について論じ、「発菩提心」巻においては前者から後者への重点の移動が見られることを指摘している。

「資料編」は、道元禅師の著作における『大智度論』からの引用について、その該当箇所と『止観輔行伝弘決』に見られる該当箇所を表に示したものである。本論文を作成するに当たっての基礎的な作業の一つとなった成果である。

II 論文の評価

本論文は、『宝慶記』を中心に道元禅師の思想形成の解明を企図したものであり、先行業績を広く渉猟して問題点を指摘し、自らの見解を示しながら道元禅師の思想を論究した大作である。道元禅師の伝記や思想の研究において、『宝慶記』を従来以上に重視して考察した点に本論文の大きな特色があり、その着想は高く評価されてよいであろう。

但し、問題がないわけではない。まず「道元禅師の思想形成の研究—『宝慶記』を中心として—」という論題にしては、『宝慶記』に焦点を絞った論述が論文全体の比重からすると軽く、また論文の構成はこれまでの論者の種々の学会発表の成果を集成して纏めた感が否めない。そのため各章間の論述の論理的脈絡、緊密さが十分とはいえず、全体として必ずしも迫力のある論述にはなっていない憾みがある。その結果、やや論旨の曖昧さを残存させることにもなっている。さらに慎重かつ謙虚な表現に徹するあまり、先にも指摘したようにそうした姿勢が論者自身の主張の力強さを奪ってしまった

感も拭えない。本論文を公刊するにあたってはそれらの部分を修正するとともに表記上の統一等、形式上の不備も是正することが強く望まれる。

ところで、周知のように、道元禅師に関してはすでに数多くの学者によってさまざまな方面から多角的に研究が進められ、あまたの研究成果が提出されている。それゆえ、かかる研究状況の中にあつては、新出資料でも発見されない限り、独創的で斬新な新知見を提示することは容易なことではない。今回の論者の本論文も斬新な新知見という観点からすると、いささか弱い面があることは率直に指摘せざるを得ないが、その一方、課程博士の学位が論者の今後の研究の飛躍を大いに感じさせる成果に与えられるものであるとするならば、本論文はこれからの道元禅師研究に新しい地平を開く可能性を大いに感じさせるものであり、十分にその要件を満たしているといえることができる。

よって、業績審査委員全員は、論者より提出された本論文は課程博士の学位にふさわしいものと判断し、課程博士の学位授与を「可」とするとの結論に達したことをここに報告する。